



山の風

谷を渡ってくる風は
木の葉をゆらゆらして
ここちよく
沢を吹き上げてくる風は
竹林の中をサワサワと
ここちよく
林の中を抜けてくる風は
春夏秋冬をも
教えてくれる

嵐もあれば 日照りもある

「人間のしあわせ」を考えながら日々の生活を味わって暮らしてみると、やっぱり行き当たるのが「教育」の重要さです。「教育」が一生の人生に与える影響は大きいからです。

自分がどんな「教育」を受けて来たのかを振り返ると、ぼくが受けてきた「教育」は残念なこと。「あまり上等とは言えない教育」だったと思えます。まあ、今さら何ともしようがないのですが。「比較と競争」という姿から一歩も出ていない「教育」を受けてきて、ケチ臭い人間になってしまいました。といくら反省しても間に合わないのですが。...

「比較や競争」をしてはいけなと言っているわけではありません。人間の頭の中の出来事では「比較や競争」はその仕組みそのものとも言えるのです。ですが、それだけに没頭しては人はしあわせの片面しか見ていないのです。

人の「しあわせ」には自然界と同じように嵐もあれば日照りもあります。この山奥に住んでいると「文明」に護られていることが少ないので、嵐や日照りには恐怖さえ覚えます。誰も助けてくれない厳しさを味わいます。

ところがもう一方で、「そんなに力まなくてもいいよ」と言ってくれるような、こちよいい風や穏やかな風が吹いて来ていることにも気づくのです。

知の感性を鈍らせない「教育」

厳しいものに抵抗していくために「強くありたい」と願うのも人情というもので、「比較と競争」に勝ちたいと願うのも自然の成り行きです。又、それに敗者となって人生から逃げて、苦しい思いをしてしまう中学生や高校生も次々とほくの所にやってきます。

自信をなくし、楽しさを忘れ、努力も放棄し、勇気もなくなり、グルリのせいにして生きて行かざるを得ないような人に、「くだかけ」とい

う活動をしている30〜40年の間に何百人と出会いました。

その原因はこの文明にあり、表面的な便利さに振り回された「教育」にあるのだと思っています。

ある種類の人たちは（世の中では少数派ですが）「感性を鈍らせた、競争原理の知育の犠牲」になっていたことが明らかなのです。その人たちはどちらかと言えば感受性の高い人達で学校の犠牲にもなっているのです。

頭のハッキリしない老人が、外は嵐なのに何も分かっていないから恐怖も緊張もないのと同じで、若い人でも嵐も日照りもそよ風も何も感じないようにして生きている人になってしまいます。その反面で、頭の中でグチャグチャとグルグルと自分のことばかり考えているので、スツキリと生きられなくなっているのです。

親や世間に甘えてダダツ子のようなことを言うから何も成長できていないんだと思ったりしてしまいます。

ところが「感性」というものに目を向けて「教育」の考え直しをしていくと、人というのはよみがえるのですね。とつても面白いことだと思えました。それで手っ取り早くするのに「あそび」を中心に据えたのです。その内容はアチコチに書いてあるのでここでは省略しますが、最近ぼくは「感性を鈍らせない教育」を提唱しているのです。

主要五教科を考え直す

中学校では主要五教科を「国数理社英」として受験競争にもこの教科を中心にしていきます。最近では「考える教育」と言って少し進化させようとしてはいますが、一向にこの枠から出られません。

「くだかけ」のように長年「教育」の根本を見直して、人間はどう生きるのが人間なのかを求め続けていると、どうもこの五教科という枠組みが足を引っ張っているように思えてくるのです。

そこで、主要五教科を「音・体・美・家・自然」にしようという提唱をはじめました。：と言っても言ってるのはまだほくだけですが。：と言うのも「感性をニブらせては人生は台無しだ」と実感したからです。

もちろん「知」の分野も大切です。知識の教育がイキイキとされていくのにもこの考えの転換はとても有効だということを実践して来たのが「くだかけ」なのです。

このことを少し根気よく伝えて行きたいと願っています。どうぞ、まずこの転換の出発点にチョットでも半分でもご賛同いただける親御さんや幼稚園から大学までの先生方がありましたら、ご連絡いただき、ご一緒に内容づくりに取り組んでいただきたいと思います。



山の茂吉 (和田重良) 老話作家
1948年、小田原生まれ。東京教育大学卒。くだかけ生活舎(神奈川県厚木市)を定場に共同生活(人生科や農作業中心)の実践をとおして、誰もがあんなにその人らしく生きることを願い、35年以上にわたって青少年や家庭の生活にさまざまなメッセージを送り続けている。